



## 附属図書館所蔵 **貴重図書展示会**

### 展示資料解説



Thomas Robert Malthus



Francis Bacon



Adam Smith

**西洋古典貴重図書本文画像示一夕公開中！**

URL : <http://www.otaru-uc.ac.jp/htosyo1/siryo/yosho/welcome.html>

2016年8月8日(月) 9:00~17:00

## ☆☆ 外国(西洋)書 ☆☆

1. Les six livres de la republique de I. Bodin Angeuin : a Monseigneur du Faur seigneur de Pibrac, conseiller de roy en son priué conseil — Paris : Chez Jacques du Puys , 1577

『国家論』 Z/TE.D/19/30518 (手塚文庫)

ジャン・ボダン(Jean Bodin, 1530-96)は、フランスの哲学者・政治思想家・経済学者である。異端審問官としても名高い。トゥールーズ大学で法学を修め、同大学教授を経て、パリで弁護士を開業する。1576年、ラオン宮廷弁護士となる。同年、三部会へ選出され、1584年まで勤める。『マレトロワ氏のパラドックスへの回答』(1568年)で、当時の物価亜騰貴の原因を新大陸からの金銀の流れに求め、貨幣数量説の先駆者となった。1576年、『国家論』で、国家主権を最高絶対なものとして近代的な主権概念を確立した。比較社会学的方法を駆使して、社会における家族の重要性と政治制度としての絶対王政の利点を強調した。工業的保護関税を説き、初期重商主義者の一人である。本書は、初めて近代的な主権概念を確立した書として世界に名高い。初版は1576年。

なお、本学は1953年版全2巻も所蔵している (O 3/7 1161 83174~5)。

2. The tvvoo [sic] bookes of Francis Bacon, of the proficience and aduancement [sic] of learning, diuine [sic] and humane / [Francis Bacon] — London : Printed for Henrie Tomes ... , 1605

『学問の進歩』 初版 Z 10/1 495 236204

フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)は、ロンドン生まれ、イギリスの哲学者・文学者・政治学者。弁護士、検事総長などを歴任した後、大法官にまで出世した。デカルトと並ぶ近代科学・哲学の創始者であり、経験から出発する帰納法の提唱者として名高い。新しい論理学『ヌーヴム・オルガヌム』、『随想集』、世界三大ユートピアの一つ『ニュー・アトランティス』などの著がある。

3. Corpus juris civilis / Dio. Gothofredo, I.C. recognitum — Sancti Gervasii : Eustathij Vignon , 1606

『ユスティニアヌス法典』(『民法典』) Z 5/1 1573 100314 (カンバセレス文庫)

本書はユスティニアヌス法典のラテン語版で、カンバセレスが『ナポレオン法典』を編纂する際に参考にしたもの。カンバセレス蔵書の一冊で、随所に彼の書き込みがなされている。

4. Thomas Campanella, von der spanischen Monarchy, oder Auszfürhliches Bedencken, welcher massen, von dem König in Hispanien, ... — [S.l.] : Getruckt im Jahr , 1620

『スペイン王国論』 ドイツ語版初版 Z 3/7 1586 262247

トーマス・カンパネラ(Thomas Campanella, 1568-1639)は南イタリア、カラブリア出身の哲学者。ただし母国語イタリア名は、トマソ・カンパネラ(Tommaso Campanella)である。本書のイタリア語版"De monarchia hispanica"は、1602年に出版されている。カンパネラは、ドミニコ会の托鉢修道士となり、テレジオ(B. Telesio)の新しい感覚論・経験論に同感し、哲学の革新を図った。当時スペインの支配下にあり、貧困と収奪に悩むカラブリアを理想的共和国に変革しようと、ナポリ独立運動(1598-99)に加わったが、捕われて、27年間に獄中で送る。その間、本書および主著『太陽の都』(1623、初稿1602年)等を書いた。これは、プラトン流のユートピア国家論で、後世のユートピア共産主義に影響を与えた。



5. The history of the Parliament of England : which began November the third, M.DC.XL. with a short and necessary view of some precedent yeares [years] / written by Thomas May — London : M. Bell, for G. Thomason , 1647

『英国議会史』初版 Z 3/6 99 28272

トーマス・メイ(Thomas May, 1595-1650)は、イギリスの詩人。戯曲を作り翻訳を行って生計をたてていたが、その文才とラテン語の能力が買われ、1645年、英国下院によって議会書記官に任命された。その後、彼は終生、議会の主張と行動を正当化するための文書の作成と翻訳に従事した。

本書は、副題にもある通り、1640年11月3日以降の議会(「長期議会」)の行動を正当化するために、議会の委託によって執筆されたものである。本書はチューダー朝以降の歴史が前史として付され、また、ピューリタン革命の前史としての内乱の状況が克明に描かれている。

6. Bernhardi Varenii Med. D. Descriptio regni Japoniæ et Siam : item de Japoniorum religione & Siamensium, de diversis omnium gentium religionibus : quibus, præmissâ dissertatione de variis rerum publicarum generibus, adduntur quædam de priscorum afrorum fide excerpta ex Leone Africano — Cantabrigiæ : Ex officina Joan Hayes ... impensis Samunelis Simpson ... , 1673

『日本王国およびシャム王国案内記』Z 5/1 122 8955

ベルンハルト・ヴァーレン(Bernhard Varen 1622-50)はオランダの地理学者、ラテン名ベルナルドゥス・ヴァレニウスの方が知られている。本書は日本とシャムについての地誌であるが、日本では本学のみ所蔵である。その地理学書『一般地誌学』は死後1世紀にわたりヨーロッパの標準テキストとして各国語に翻訳され流布した。

7. The primitive origination of mankind, considered and examined according to the light of nature / written by the Honourable Sir Matthew Hale, knight — London : Printed by William Godbid, for William Shrowsbery , 1677

『人類の起源』Mi 7/5 157 90842 (南文庫)

マチュー・ヘイル卿(Sir Matthew Hale 1609-76)はイギリス慣習法の歴史における最高の学者の一人。1648～52年のチャールズ1世と国会との争いにおいて法的に中立を貫いたことで有名。

8. Testament politique de messire Jean Baptiste Colbert, ministre et secretaire d'Etat : où l'on voit tout ce qui s'est passé sous le regne de Louis le Grand, jusqu'en l'année 1684 : avec des remarques sur le gouvernement du royaume — A La Haye : Chez Henry van Bulderen, marchand libraire ... , 1693

『コルベール閣下の政治的遺言』初版 Z 3/7 276 9370 (シエル文庫)

ジャン・バティスト・コルベール(Colbert, Jean Baptiste, 1619 - 1683)は、絶対王政の財源を支えるために、典型的な重商主義政策を実施した、ルイ14世治下のフランスの財務総監。この時期のフランス重商主義は、彼の名をとって、コルベール主義と呼ばれることが多い。この『政治的遺言』は、自らの政治生活を歴史的に振り返りながら、フランスの将来に関する提言をまとめたもので、コルベールの没後1693年に出版された。

9. An essay upon the probable methods of making a people gainers in the ballance of trade : treating of these heads, viz. of the people of England, of the land of England, and its product ... / Charles Davenant ; by the author of the Essay on ways and means — London : Printed for James Knapton , 1699

『貿易差額についてのエッセイ』初版 Z 1/1 332 17590

チャールズ・ダヴナント(Charles Davenant, 1656-1714)は、重商主義期のイギリス(イングランド)で自由貿易を主張した代表的論客であり、国内消費税委員、輸出入総監を歴任した。彼は、この『貿易差額についてのエッセイ』などを著し、全般的貿易差額説に依拠しながら中継貿易の利益を擁護した。

10. Johann George Leibs, J.U.D., Erste [-Vierdte] Probe : wie ein Regend Land und Leute verbessern, des Landes Gewerbe und Nahrung erheben, seine Gefälle und Einkommen sonder Ruin derer Unterthanen billigmäßiger Weise vermehren, und sich dadurch in Macht und Ansehen setzen könne ... / [Johann George Leib] — Leipzig ; Franckfurth : Zufinden bey Friedrich Lanckischens sel. Erben , 1708

『国家と人民の改良 いかにして君主は権力と名望を高めることができるか』初版 Mi3/7 1239 90868 (南文庫)

ヨハン・ゲオルグ・ライプ (Johann George Leib, 1670-1727)は典型的なドイツの古典的官房学者である。このライプの主著『国家と人民の改良』は、四編の試論から成る。この書物から生粋の重商主義者であると同時に国民経済

学者と私経済学者でもあることがわかる。「国全体の経済力を高める」ということが、ライプの基本法則である。金は、国の中で循環しなければならぬし、農民・手工業者・商人等は、お互いに協業しなければならぬとした。彼は、かつ、マニファクチュア(工場制手工業)と商業の繁栄のための可能性について考察し、市場独占権を持った植民地などの貿易商社の設立を提案し、振り替え銀行及び貸出銀行から、貯蓄銀行や火災保険に至るまでの創設を提唱する。間接国税をもっとも公正な税金と見なし、また、きちんとした貨幣制度の確立を主張する。

11. Le droit de la guerre et de la paix / par Hugues Grotius ; nouvelle traduction, par Jean Barbeyrac — A Amsterdam : Chez P. de Coup , 1724

『戦争と平和の法』 Z/TE.D/339/30838 (手塚文庫)

フーゴー・グロティウス(Hugo Grotius, 1583-1645) は、オランダの法学者・政治家。近代国際法の父と言われる。本書は、彼の不朽の名作『戦争と平和の法』の、バルベイラックによる著名なフランス語訳である。原著はラテン語(De jure belli ac pacis, 1625.)。一巻本が東京大学(法・経) に、二巻本が北海道大学、東海大学にある。

12. A plan of the English commerce : being a compleat prospect of the trade of this nation, as well the home trade as the foreign : in three parts ... / [Daniel Defoe] — London : Printed for Charles Rivington , 1728

『イギリスの貿易事情』 初版 Z 1/1 184 8769

イギリス(イングランド)に生まれたダニエル・デフォー(Daniel Defoe, [1661]-1731)は、『ロビンソン・クルーソー』の作者であると同時に、自由貿易の論客でもあった。この『イギリスの貿易事情』(1728年)で、彼は高賃金が労働意欲を、さらには労働能力を高め、国際競争力を持つ商品の生産を可能にしたと主張した。この「高賃金の経済論」によって、イギリスの優位な生産力を背景として自由貿易の主張を展開していった。

13. Abrege du projet de paix perpetuelle, inventé par le roi Henri le Grand, Approuvé par la Reine Elisabeth, par le roi Jaques son successeur, ... / par Mr. L'abbe de Saint-Pierre — Rotterdam : Chez Jean Daniel Beman, et se vendee à Paris chez Briasson , 1729

『永久平和論』 Z/TE.D/200/30699 (手塚文庫)

シャルル・サン＝ピエール(Charles Saint-Pierre, 1658-1743)は、フランスの聖職者・外交官。本書は、彼が参加したユトレヒト平和会議(1712年)に因んで書かれたもので、ルソーやカントたちの平和論に大きな影響を与えた。初版は1713年。

14. A new discourse of trade : wherein are recommended several weighty points, relating to companies of merchants : the act of navigation, naturalization of strangers, and our woollen manufactures ... : to which is added, a short, but most excellent treatise of interest / by Sir Josiah Child, Baronet — The fourth edition — London : Printed for J. Hodges [and 5 others] , [1740?]

『新交易論』 Z 1/1 320 16753

イギリス(イングランド)に生まれたジョサイア・チャイルド(Sir Josiah Child Bart., 1630-1699)は貿易商として歩み始め、1681年に東インド会社総裁に就任した。本書には、通商会議(Council of Trade)に示した彼の見解がまとめられており、繁栄する当時のオランダ参考に、イングランドでの銀行の設立と為替手形の利用促進が主張されている。現在では、チャイルドは初期重商主義者の一人と見なされている。初版は1693年に刊行されている。

15. A dissertation on the numbers of mankind in antient and modern times : in which the superior populousness of antiquity is maintained : with an appendix, containing additional observations on the same subject, and some remarks on Mr. Hume's political discourse, Of the populousness of antient nations — Edinburgh : Printed for G. Hamilton and J. Balfour , 1753

『古代および近代の人口』 初版 Z 4/4 923 15160

イギリス(スコットランド)に生まれたロバート・ウォーレス(Robert Wallace, 1697-1771)は本書で、デイビッド・ヒューム『政治論集』(初版 1752年(展示書番号32; Z 4/2 754 17875))の古代国家の人口推計を批判し、後に『人口論』(初版、1798年(展示書番号43; Z 4/2 530 6925; Z 4/2 528 8134))を著したマルサスに影響を残した。

16. Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres / mis en ordre & publié par M. Diderot ; et quant a la partie Mathématique par M. D'Alembert — Paris : Briasson , 1751-1780

デイドロ編 フランス『百科全書』(全35巻)

Z 12/1 106 238628-35, 238748-53, 238916-22, 239176-82, 239271-77

18世紀後半、フランスのブルボン王朝の時代に、ドニ・デイドロ(Deni Diderot, 1713-84)及び、ダランベール(D'Alembert, 1717-83)の編集した、フランス『百科全書』(1751-65)は、「啓蒙の世紀が私たちに残したこの上もなく壮大な記念碑」(フランスの『百科全書』研究家 J. プルースト)である。これはフランス革命を精神的に準備した。彼らは、すべてを理性の光にあてて、解明しようとした。

寄稿者には、ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-78)、ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)、ケネー(Quesnay, 1694-1774)、モンテスキュー(Montesquieu, 1689-1755)、ドルバック(D'Holbach, 1723-83)、テュルゴー(Turgot, 1727-81)らの大思想家がいる。ビュフォン(Buffon, 1707-88)も執筆しなかったが、協力した。

これは、啓蒙主義の集大成であった。これで啓蒙主義が誕生した。1751年に第1巻が出て、21年間にわたって順次に刊行され、その後の巻を入れて全35巻である。子牛の皮で装幀されている。執筆者は、分かっているだけで200人以上で、当時一流の思想家・学者・技術者、および無名の人々によって執筆された。この『百科全書』は、弾圧を受けながら発刊された。市民階級が勃興すると『百科全書』が出るのである。初版はパリで、第2版はジュネーブで発行された。初版は千部発行され、大いに売れた。

1746年、『百科全書』の発行が許可された。イギリスのチェンバーズの『百科辞典』の翻訳としてである。デイドロは、それを発展させるのである。1749年、デイドロが逮捕された。ヴァンセンヌの塔に閉じ込められ、この釈放運動が始まった。デイドロは城館に移されたが、弾圧によりダランベールは途中でやめた。

近代社会科学の歴史でもっとも華々しいのはフランスの18世紀であり、その中でも1つの書物をあげよというと、これである。ただし、この啓蒙主義は王制自体を非難したわけではない。

モンテスキューは、『百科全書』では、「趣味」などを執筆している。ヴォルテールは、劇作家、小説家、歴史家であり、18世紀は彼の世紀とまで言われた人である。ルソーは、当時、デイドロの友人で、『百科全書』の「音楽」の項を依頼された。彼の「経済」(Economie)も第5巻にある。デイドロは、『百科全書』の共同編集、最高責任者であり、多くの項目を執筆し、これに生涯をかけた。ダランベールは、『百科全書』のコ(=共同)・エディターで、「百科全書序文」を書き、寄稿もする。ケネー(重農主義経済学者)は『百科全書』に3点寄稿した。「明証」(Evidence)を第1巻に、「小作人」(Fermiers)、を第6巻に、そして「穀物」(Grain)。彼は、『経済表』(1758年初版)で、有名である。テュルゴー(Turgot, 1727-81)は、経済学者で政治家、主著『富の形成と分配についての省察』で有名である。

フランス文化の宝物である『百科全書』は、日本では、東京大学、京都大学、一橋大学、九州大学、福島大学、図書館情報大学にある。本学が1997年に入手したこの『百科全書』は、19世紀アメリカの高名な挿し絵画家アビーの蔵書だった。したがって、アビーの蔵書シールがある。

全体の構成は、本巻28巻(うち本文17巻、図版11巻)、デイドロとダランベールが編集したが、弾圧で、途中でダランベールが降り、デイドロが独力で完成した。補遺5巻(うち本文4巻、図版 1巻)はロビネが作った。索引2巻 はムシヨンが作った。

標題は、「アンシクロペディ、または科学、工芸の解明事典、文士のある集団による。プロイセン科学文学王立アカデミーのデイドロ氏、そして数学の部分については、パリのそしてプロイセンの王立科学アカデミー、およびロンドンの王立協会の、ダランベール氏によって、編集され刊行された」とある。そして続いて、ホラチウス(Horatius)の文章が掲げられている。それは2行あるが、第1行目は、「かくも按排と接合とは有効なり。」第2行目は次の通り。「かほどの名誉が、[日常生活の]真中より取られたるもの(演劇)に加えられる。」

諸巻の背表紙にplancheとあるのは、版画という意味であるが、図巻であり、図解がなされる。Table とあるのは、表、一覧表のことで、つまり索引である。Supplement は、補遺、つまり補巻である。また、『百科全書』の扉絵は特に有名で、初版にのみ載っている。

17. *Traité des effets et de l'usage de la saignée* / par M. Quesnay — Nouvelle ed. — Paris : D'Houry , 1750

『刺絡の効用について』、通称『血液論』 Z 7/6 17 9886 (シエル文庫)

フランソワ・ケネー (Quesnay, François, 1694-1774) はフランスの重農主義経済学の創始者。16才で外科医に弟子入りし、その後パリの医学校で学ぶ。24才で開業。1769年55才のときボンパドゥール夫人の侍医となり、ヴェルサイユ宮殿に入る。最終的にはルイ15世の侍医となる。侍医を務めるかわら、ヴェルサイユ宮殿の「中二階」自室にサロンを開き経済学を論じた。この『血液論』に見られるように、ケネーはハーヴェイの血液循環論を支持したが、それは主著『経済表』の経済循環の発想の根源にもなっている。

18. *Principes du droit politique* / J.J. Burlamaqui — Amsterdam : Chez Zacharie Chatelain , 1751

『公法原理』(全2巻) T.1: Z/TE.D/24/30523, T.2: TE/D/25/30524 (手塚文庫)

ジャン=ジャック・ビュルラマキ (Jean-Jacques Burlamaqui, 1694-1784) は、スイスの法学者、ジュネーヴ大学教授。自然法、刑法、国際法に関する著作によって、イギリス、アメリカの法学、フランスの政治思想に多大の影響を及ぼした。本書はそのなかの『公法原理』の完全版の初版で、手塚文庫にはこの他に『自然法原理』(Éléments du Droit naturel. Lausanne, 1775.) を含んでいる。

19. *Collection complete des œuvres de l'abbé de Mably* —Paris : De l'imprimerie de Ch. Desbriere , l'an III de la République (1794 à 1795)

『マブリ著作全集』(全15巻) TE/D 104 30603~TE/D 118 30617 (手塚文庫)

マブリ (Gabriel Bonnot de Mably, 1709-85) は、フランスの歴史家・哲学者・外交官。『ヨーロッパの公法』を著し、国際法の権威となる。後に、モレリの影響を受け、共産主義思想を説く。彼の思想は、ルソー、ロベスピエール、バブーフ等に影響を与え、サン・シモンやルードンを経てマルクスに至る、平等主義、社会主義、共産主義の系譜の源流をなす。

20. *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inegalité parmi les hommes* / par Jean Ja[c]ques Rousseau — Amsterdam : M. Michel , 1755

『人間不平等起源論』 初版 Z 10/2 1484 239141

ジャン=ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) は、ジュネーヴ生まれで、放浪を重ねた後、1741年にパリに移った。当初、ボルテールやデイドロなどの啓蒙主義者たちと親交を深めたが、後に袂を分かって独自の思想的展開を行う。出世作としての『学問芸術論』、フランス革命の思想的基盤を用意した『社会契約論』、教育論として名高い『エミール』などの著作のほか、戯曲を書き、作曲を行い、楽譜を考案するなど音楽家的才能も持つ。本書は、フランス革命以降の平等主義に多大の影響を与えた挑戦的著作の初版本である。

21. *Les confessions* / J.J. Rousseau — Genève : [s.n.] , 1782-1789

『告白』(4巻) Z 10/2 1489 244982-5

本書は、ルソーの自叙伝で、これによって自己をありのままにさらけ出す「自叙伝」という新たな文学形式が定着したと言われている。

22. *Les lois civiles dans leur ordre naturel, le droit public, et Legum delectus* / par M. Domat — Nouvelle édition, revue, — Paris : Chez Durand ... , 1767

『自然秩序における市民法』 Z 3/2 514 107103

ジャン・ドマ (Jean Domat, 1625-96) は、フランスの法学者。パスカルの親友。本書は、彼の畢生の名著で、後にナポレオン法典の資料になる。初版は1689-94年。

23. *Idées sur les bases de toute Constitution* / par M. Rabaut de Saint-Etienne — [Paris] : [Baudouin] , [1789]

『憲法の原理』 Z 5/1 1036 67776 (フランス革命資料文献)

ラボー・ドゥ・サン=テチエンヌ (Rabaut de Saint-Etienne, 1743-93) は、フランスの聖職者・弁護士・政治家・文筆家。フランス革命初期の第三身分代表で穏健派議員。このパンフレットは、彼が国民議会に提出した憲法草案『憲法の原理』を議会が印刷したものである。本学所蔵の「フランス革命資料文献」には、当時の様々なパンフレット・布告・印刷物が含まれ、この憲法草案はその一例である。

## 24. Assignat

アッシニア紙幣 Z 5/1 1036 67850 (フランス革命資料文献)

アッシニア紙幣は、フランス革命期に没収された聖職者の財産を担保として1789年から1796年まで発効された不換紙幣。当時大量に乱発されたためにインフレを巻き起こした。その現物である。

## 25. Cambacérés, Jean-Jacques Régis de, duc de Parme, (1753-1824) Manuscrits.

(カンバセレス文庫 全32冊)

カンバセレス(Cambacérés, Jean-Jacques régis de, duc de Parme, 1753-1824)は、本解説No.3でも紹介したとおりナポレオン法典編纂の中心人物であった。これは彼の学生時代からのいわゆる研究ノートにあたるもので、その理論形成をたどる上で貴重な図書である。この手稿はもともと一つのコレクションであったが、2分割され国学院大学と本学とにそれぞれ収蔵されることになった。

本学の所蔵の一例を以下に示す。

25-1. Traité des tailles [Manuscrits] (Z 5/1 1564 100300)

25-2. Du Pouvoir de la chambre des comptes [Manuscrits] (Z 5/1 1565 100301)

25-3. Institutions de justinien. [Manuscrits] (Z 5/1 1566 100302)

25-4. Recueil de lois. [Mnuasucrits] (Z 5/1 1567 100303)

25-5. Déclaration sur les ordonnances de Louis XIV. [Manuscrits] (Z 5/1 1568 100304)

25-6. Jurisprudence, tome I, tome II. [Manuscrits] (Z 5/1 1569 100305-100306)

25-7. Les institutions du droit françois, suivant l'ordre de celles de Justinien. – Paris, 1753 (Z 5/1 1570 100307)

25-8. Guy, du Roussend de la Combe Recueil de jurisprudence du pats de droit écrit et coutumier. – Paris, 1753 (Z 5/1 1571 100308)

25-9. Procès-verbaux du Conseil d'État : contenant la discussion du projet de code civil. – Paris, [1802?]-1804, 5 vols. (Z 5/1 1572 100309-100313)

25-10. Projet de code civil. – Paris, 1796 Z 5/1 1574 100315

25-11. Ordonnance de Louis XIV, donnée à S. Germain-en-Laye, au mois d'Avril 1667. – Paris, 1753 (Z 5/1 1576 100317)

これらは、カンバセレスの後期の手稿と蔵書の一部である。このうち『人頭税論』にはモンペリエ手形裁判所の審理に関する彼の見解が記録されている部分があり、これは学問的にも第一級の資料価値があり、全容の解明が望まれる。

## 26. Réimpression de l' Ancien Moniteur. – Paris, 1796-1802.

『アンシアン・モニトゥール』(全86巻) Z 5/1 1377 84798-84881

本書は、現在の官報 (Journal Officiel) が刊行されるまで、準官報の役割を担った新聞で、フランス革命期の広報紙とも言える貴重な第一次資料 のオリジナルである。

## 27. Histoire parlementaire de la Révolution française, ou, Journal des Assemblées nationales, depuis 1789 jusqu'en 1815, contenant ... / par P.-J.-B. Buchez et P.-C. Roux — Paris : Paulin, 1833-1838

『フランス革命議会史』(全40巻) Z/TE.D/437/30936~Z/TE.D/486/30985 (手塚文庫)

本書は、ビュッジェ(Philippe Joseph Benjamin Buchez, 1796-1865)と、ルー (Pierre-Celestin Lavergne Roux, 1802-) によって編纂されたフランス革命議会の議事録である。

ビュッジェはフランスのアルデンヌ(現ベルギー)生まれの哲学者・社会学者・歴史家・政治家で、ジャーナルを発行し、本を執筆し、1848年の憲法制定議会の議長を勤めている。

ルーは、フランスの文筆家・政治家で、国会議員や大学教授を勤め、ビュッジェの思想に傾倒して本書の編纂に協力した。

本書の記事の大部分は「モニトゥール」によるもので、これに解説と序文をふしたものである。ビュッジェは、カトリシズムと民主主義の協和を目指し、フランス革命を擁護する目的で本書を編纂したと言われている。

28. Archives parlementaires de 1787 a 1860. 1ère, 1787 à 1799 : recueil complet des débats législatifs et politiques des Chambres francaises — Paris : Centre National de la Recherche Scientifique — Reprint ed. 1969

『革命議会議事録』(全91巻) T 3/7 995 71708 他

「革命議会議事録」は、1862年に企画され、1867年に刊行されたフランス最初のフランス革命公式議会議事録である。その主要な資料的土台は、前出の『アンシアン・モニテール』および『フランス革命議会議事録』で、これに様々な資料から得られた記録を加味して編纂された。但し、本書は1969年の復刻版である。

29. A vindication of the rights of woman : with strictures on political and moral subjects / by Mary Wollstonecraft — London : Printed for J. Johnson , 1792

『女性の権利の擁護』 Z 10/8 211 235714

メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-1797)はイギリスにおける最初のフェミニズム理論家である。ウルストンクラフトは、『女子教育考』(1787)や本書『女性の権利の擁護』(初版 1789年)など、若い女性むけに数多くの手引き書を執筆した。ウルストンクラフトの主著『女性の権利の擁護』は、現在ではフェミニズム理論の古典となっている。彼女は、女性が不当にも、知性の習得を妨げられ、かつ男性への従属を教え込まれる社会化の過程によって、女性は奴隷化され、社会・家庭の中でみじめな状態にあるとした。だから、女性の市民的・社会的解放のために、女性の参政権も含め、人権としてのシティズンシップの獲得を訴えている。その際、教育こそが、女性の発展のための平等な機会を与えることができるとし、教育改革による女性の地位向上を主張した。彼女は、また、啓蒙運動の原則は、男性と同じように女性に対しても同等の扱いをするという信条をもち、そのリベラルで平等主義的な考えは、たとえば、男女平等や男女機会均等々の根拠として、多くの現代政治規範の基礎となっている。

30. Godwin, William. (ウイリアム・ゴドウィン名著)

ウイリアム・ゴドウィンは(William, Godwin, 1756-1836)は、イギリスの急進的政治学者・小説家。一時期カルヴァン派の牧師となったが、フランス啓蒙主義に接して牧師を辞めて文筆業に入る。フランス革命に触発されて主著『社会的正義』を書き、政府と私有財産を否定する平等主義を主張し、世界最初の無政府主義者とも言われる。本書を批判したマルサスの『人口論』に対する反批判として『人口論』(Of population, 1820)を書いている。

「女性解放の開祖」と言われるメアリ・ウルストンクラフトは彼の妻である。

30-1. An enquiry concerning political justice, and its influence on general virtue and happiness / by William Godwin — London : Printed for G.G.J. & J. Robinson , 1793

『政治的正義』 初版 Z 3/7 171 6836-7 (大西文庫)

30-2. A primer of ALGOL 60 programming / by E. W. Dijkstra — London : the Automatic Programming Information Centre, by Academic Press , 1962

『研究者』 初版 Z 10/6 291 20103

30-3. Reply to the attacks of Dr. Parr, & C. — London : Taylor and Wilks, and others , 1801

『S.パーの攻撃への返答』 初版 Z 10/6 89 8146

30-4. Of population / by William Godwin — London : Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown , 1820

『人口論』 初版 Z 4/1 978 /22125 (鬼頭文庫)、Z 4/2 531 6927 (大西文庫)

30-5. Thoughts on man, his nature, productions, and discoveries; interspersed with some particulars respecting the author / by William Godwin — London : Effingham Wilson , 1831

『人間の思想』 初版 Z 10/1 276 22287 (鬼頭文庫)

31. Della moneta, libri cinque / Ferdinando Galiani — 2. ed. — Napoli : Nella Stamperia Simoniana , 1780

『貨幣論』 第2版 Z 1/2 641 15016

フェルディナンド・ガリアーニ(Ferdinando Galiani, 1728-1787)は、ナポリ王国(現在、イタリア)に生まれ、生涯の大半に渡って政府に務めた。本書で彼はケネーやアダム・スミスと同じく効用と稀少性に基づく価値論を展開しつつ、後の世代が進展させた概念(主観的需要、逓減の限界効用、需要の価格弾力性、利子の時間選好理論)の予兆を記している。初版の刊行は1750年であった。



32. An inquiry into the principles of political oeconomy : being an essay on the science of domestic policy in free nations : in which are particularly considered population, agriculture, trade, industry, money, coin, interest, circulation, banks, exchange, public credit, and taxes / by Sir James Steuart, Bart — London : Printed for A. Millar, and T. Cadell , 1767

『経済学原理』(全2巻) 初版 Z 4/2 882 19356-19357

重商主義経済学説は、本書によってまとめあげられた。しかしながら、後にアダム・スミスは本書を、『国富論(諸国民の富)』(本解説No.38: Z 4/2 294 6838-6839)で批判するのであった。

ジェームズ・スチュアート(James Denham Steuart, 1712-1780)はイギリス(スコットランド)の貴族で、「最後にして最大の重商主義者」と呼ばれる。イングランドに反抗したジャコバイトの乱が失敗した後、ヨーロッパ大陸での長い亡命生活の間に執筆を開始した本書『経済学原理』は、経済学にpolitical economyという用語を用いた最初の著作である。彼は、ここで有効需要論を軸にした重商主義的な経済政策の必要性を主張した。

33. Political discourses / by David Hume — Edinburgh : printed by R. Fleming, for A. Kincaid and A. Donaldson , 1752

『政治論集』 Z 4/1 754 17875

デイビッド・ヒューム(David Hume, 1711-1776)は、イギリス啓蒙哲学の代表者。

この『政治論集』(1752年)において、農工分離による生産力の発展を主張する一方で、貨幣数量説と国際間の貨幣量の自動調整論(スペシー・フロー・メカニズム)を展開して自由貿易の必然性を論証した。

34. Dialogues concerning natural religion / By David Hume — 2nd ed. — London : [s.n.] , 1779

『自然宗教論』 第2版 Z 10/7 454 244979

対話体で書かれた、ヒュームの宗教論上の代表作である。ここに「自然宗教(natural religion)」とは、啓示などに頼らず、あくまで合理的な観点から宗教を理解してゆこうとする立場を指している。特にこの著作では、そうした立場でしばしば援用される、ある種の神の存在証明がテーマになっている。今日では「設計計画からの証明(argument from design)」と呼ばれるその証明は、世界のうちに一定の合目的な秩序があることを認め、そこから、それをもたらした原因として唯一絶対的な「神」を推理しようとするものである。その証明の正当性をめぐって三人の対話者(デメア Demea、クleanthes Cleanthes、フィロ Philo)が議論を展開してゆくが、その際、それぞれの対話者は、そもそも「結果」から「原因」を推理するとはいかなることであり、またそうした推理が信憑性を持ちうるためにはいかなる条件が満たされねばならないか、という認識論的な議論にも踏み込んでゆく。ヒュームは、対話体の採用によって自身の考え方をストレートに表すことを巧みに避けている。しかし、この著作の中にキリスト教的な一神教に対する懐疑的・否定的な見方が現れていることは、一目瞭然であり、そのゆえにヒュームも、これが世間に与える影響をはばかって、これを生前に公表することを避けたほどである。しかし彼の死後、この著作はカントやトマス・リードなどにも大きな影響を与え、また、そこで扱われている証明の妥当性をめぐっては今日でもなお活発な議論が続いている。

35. The theory of moral sentiments, or, an essay towards an analysis of the principles by which men naturally judge concerning the conduct and character, first of their neighbours, and afterwards of themselves : to which is added, a dissertation on the origin of languages / by Adam Smith — 5th ed. — London : Printed for W.

Strahan, J. and F. Rivingston, ... [et al.] , 1781

『道徳感情論』 第5版 Z 10/5 92 8159

イギリス(スコットランド)に生まれ、経済学の創始者と見なされるアダム・スミス(Adam Smith, 1723-1790)は、本書によってその名を広めた。グラスゴウ大学の道徳哲学教授であったスミスは、この『道徳感情論』で、近代市民社会の形成原理を利己心に基づく人間行動に求め、資本主義経済に通じる新しい社会観を示した。初版は1759年に刊行されている。

36. An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations / by Adam Smith — London : Printed for W. Strahan, and T. Cadell , 1776

『国富論(諸国民の富)』(全2巻) 初版 Z 4/2 294 6838-6839 (大西文庫)

1776年は、太平洋の両岸で、〈自由〉という概念が歴史に刻まれた年だった。この年に、アメリカはイギリスの植民地支配からの独立を宣言し、〈自由の天地〉を築いてゆこうとしていた。そのイギリスでは、スコットランド人の道德哲学教授、アダム・スミス(Adam Smith, 1723-90)が、同じ年に、自由主義を基盤とする経済理論を発表している。この著作が、経済学の誕生を告げる、『諸国民の富の性質および諸原因に関する一研究』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)、すなわち、『国富論』である。

それまでの重商主義という経済統制政策を批判する目的で、『国富論』は、自由競争こそが資源の最適配分ともっとも速やかな経済成長を可能にすることを論証した。この「神の見えざる手」というスミスの思想は、現代の経済学にも受けつがれている。資本主義という経済システムの性質と自由競争市場の機構を初めて明らかにした『国富論』は、刊行されてから200年以上たった今も、経済的自由を考えるための指針を提供してくれている。

本書は、小樽高商教授・大西猪之介の蔵書であった。大西没後、遺族が本学へ寄贈した。ただし、この商大本には「高松教授」と鉛筆書きされているので、当時高商に勤めていた高松勤に関係があるかもしれない。

37. Essays on philosophical subjects / by the late Adam Smith ; to which is prefixed an account of life and writings of the author by Dugald Stewart — London : Prin.T. Cadell Jun. & W. Davies and W. Creech , 1795  
『哲学論文集』 初版 Z 10/2 212 8192

スミスの死後、遺稿集である本書は二人の友人ジョセフ・ブラックとジェームス・ハットンの手によって刊行された。

38. Autograph letter, signed, to Charles Bunbury / [by] Jeremy Bentham — [London] : [Jeremy Bentham] , 1803  
『ペンサム自筆手紙』 Z 9/4 186 253232

ジェレミー・ベンサム(Bentham, Jeremy, 1748-1832)は、功利主義を主張した高名なイギリスの哲学者である。ロンドンで生まれ、はじめ弁護士、その後、民間学者であった。著作『注釈についての注釈』(1776年)、『道德および立法の原理の序論』(1789年)などがある。

彼は弟と協力して理想的刑務所「パノプティコン」を設計した。当時の刑務所は、施設が非人道で、むしろ罪人を苦しめ殺すための収容所であった。不必要な苦しみを与えることを悪と考えるベンサムは、刑務所をもっと人道的かつ能率的にし、囚人に労働させつつ、最小費用で監督ができるよう、円型の刑務所を考えた。中央の一番高い所に監視所があり、ここから一人の看守が多くの囚人を監督するのである。そして、囚人の死亡率が減少すればそれだけ管理者の収入が増す、という案である。パノプティコンは、18世紀末ベンサムが考案した理想の監獄建築、一望監視施設である。ギリシャ語の、パン=汎、オブティ=視、オブティコン=見張り台から名付けた。

なおベッカリーア(1738-1794)の『犯罪と刑罰』(1764年)が、ベンサムの監獄改革論に影響を与えた。またすでにベッカリーアのその書の第一章序論で、「最大多数の最大幸福」が述べられている。

ベンサムは、この計画の実現のために、この書簡で言及されている内相ペラム卿をはじめ、さまざまな働きかけを行なった。この1803年6月のチャールズ・バンベリー宛の書簡では、ペラム内相への運動の失敗について論じており、ベンサムの失望感が如実にあらわれている。王党派から急進派を標榜するにいたった彼の政治的変貌の背景には、政府官僚に対する幻滅が指摘されるが、パノプティコンをめぐる確執も、彼の思想が新たな展開をしめす重要な契機の一つとみなせる。この書簡は、『書簡集』第7巻に収録されているが、大英博物館所蔵の写しにもとづいており、このオリジナルによるものではない。

39. The state of the poor, or, An history of the labouring classes in England, from the conquest to the present period in which are particularly considered, their domestic economy ... : together with parochial reports relative to the administration of work-houses ... : with a large appendix ... / by Sir Frederic Morton Eden, Bart — London : Printed by J. Davis, for B. & J. White [and 6 others] , 1797. 3 vols.  
『貧民調査』(全3巻) 初版 Z 4/4 494 8886-8888

イギリス(イングランド)人事業家フレデリック・イーデン(Sir Frederic Morton Eden, Bart. , 1766-1809)による本書は、18世紀後半のイギリス貧民層の生活実態を詳細に記述している。彼は、当時として珍しく調査員を雇って個々の教会を中心とする教区内の貧民数や賃金、家計状況などを調査した。この調査などの結果、公的な救貧支出はナポレオン戦争後の1818年頃まで増大していくことになった。また、イーデンの実証的な方法は、社会調査の分野での革新と見なされ、後にルプレ(M. F. Le Play)らによって引き継がれていった。

40. Malthus, Thomas Robert (人口論 各版)

40-a. An essay on the principle of population, as it affects the future improvement of society. With remarks on the speculation of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers — London : Printed for J. Johnson ... , 1798

『人口論』 初版 Z 4/2 530 6925 (大西文庫) ; Z 4/2 528 8134

匿名で刊行された本書(初版)は、イギリス古典派経済学者トマス・ロバート・マルサス(the Rev. Thomas Robert Malthus, 1766-1834)の最も著名な書である。その主張は、「人口は、もしなんらの阻害要因がなければ等比級数的に増加する。しかし、食糧供給は等差級数的にしか増加しないから、貧困は不可避である。」というマルサスの法則であった。父に促されて著された本書は、副題が示すように当時の支配的な世論を批判する内容であった。

本蔵書は初版(1798年)であるが、マルサスは生前に第5版まで出版している。そして版を重ねるごとに増量している。また、本蔵書は小樽高商教授大西猪之介がこれを入手し、氏の没後、家族によって寄贈された。

40-b. An essay on the principle of population, or, a view of its past and present effects on human happiness : with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions / by T.R. Malthus — new ed., very much enlarged — London : Printed for J. Johnson , 1803

『人口論』 第2版 LHE/ M 2601 2 47228 (早川文庫)

初版刊行後の1801年に、イギリスで初めて国勢調査が行われ、人口の急増が明らかになった。その結果から世論の変化を感じたマルサスは、新しい副題を付けて第2版を刊行した。大幅に改訂されたこの版では、貧困を予防する手段として、人口の道徳的制限の必要性を主張する記述が付け加えられた。

40-c. An essay on the principle of population, or, A view of its past and present effects on human happiness : with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions / T.R. Malthus — 3rd ed. — London : Printed for J. Johnson , 1806

『人口論』 第3版 (全2巻) Mi 5/3 826 90890-1 (南文庫) ; LHE/M 2601 47226-7 (早川文庫)

40-d. An essay on the principle of population, or, A view of its past and present effects on human happiness, with an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions / by T.R. Malthus ...

— 4th ed. — London : Printed for J. Johnson ... by T. Bensley , 1807

『人口論』 第4版 (全2巻) Mi 5/3 827 90904-5 (南文庫)

小樽高商教授南亮三郎の蔵書であった本書(第4版)には、弟子のホルト・マッケンジーにあてた、マルサスの次の献辞が残されている。

「From the author, in testimony of his most sincere regard for his pupil and friend, Mr. Holt Mackenzie.」

41. The grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn : intended as an appendix to "Observations on the Corn Laws" / by the Rev. T.R. Malthus — London : Printed for John Murray and J. Johnson and Co. , 1815

『外国穀物の輸入を制限する政策についての意見の諸理由』 初版 Z 4/3 170 8139

18世紀最後の4半世紀に進行した産業革命なかで、イギリスは穀物の恒常的輸入国となっていった。穀物輸入を巡る政策論争(穀物法論争)には、多くの経済学者が加わり、マルサスもリカードゥとの間で論争を繰り広げた。リカードゥが穀物の自由貿易を主張したのに対して、マルサスは輸入制限を主張した。本蔵書並びに次の書は、これらの論争の中で、マルサスが著した冊子である。また、『経済学における諸定義(解説No.46)』も初版を所蔵している。

42. Observations on the effects of the corn laws, and of a rise of fall in the price of corn on the agriculture and general wealth of the country / by Rev. T.R. Malthus — 3rd ed. — London : Printed for John Murray , 1815

『穀物法についての考察』 第3版 Z 4/3 169 8137

前項参照。初版は1814年に刊行された。

43. An inquiry into the nature and progress of rent, and the principles by which it is regulated / by the Rev. T.R. Malthus — London : Printed for John Murray, and J. Johnson and Co. , 1815

『地代の性質および増進』 初版 Z 4/2 394 8138

マルサスがリカードゥとの穀物法論争の中で著した冊子の一つである。

44. Additions to the fourth and former editions of An essay on the principle of population &c. &c. / by T.R.

Malthus — London : John Murray , 1817

『人口論の第4版および以前の版に対する補遺』 初版 Z 4/2 864 18925

本書は、マルサス『人口論』第4版の第3巻に当たる。

45. Principles of political economy : considered with a view to their practical application / by the Rev. T.R.

Malthus — London : J. Murray , 1820

『経済学原理』 初版 Z 4/2 532 8135

マルサスの経済理論上の主著である本書は、友人で論敵であったリカードゥに刺激されて、執筆された。彼は、本書で需給均衡による価格決定を説く一方で、有効需要の不足による過小消費説を展開して、セイの『販路の法則』を批判した。アダム・スミスの経済学をリカードゥと共に発展させたマルサスは、古典経済学者の1人と見なされている。後に、マルサスから影響を受けたケインズ(J. M. Keynes, 1883-1946)は、『一般理論』(展示書番号75; 0 1/2 2295 83638 ; S 4/2 889 19491) 第23章で本書の有効需要理論を引用している。更に同じ箇所、ケインズはマルサスの有効需要理論に耳を貸さなかったリカードゥを批判している。

46. Definitions in political economy : preceded by an inquiry into the rules which ought to guide political economists in the definition and use of their terms : with remarks on the deviation from these rules in their writings / by the Rev. T.R. Malthus — London : John Murray , 1827

『経済学における諸定義』 初版 Z 4/2 381 8143

47. Ricardo, David (経済学及び課税の原理 各版)

47-a. On the principles of political economy and taxation / by David Ricardo — London : John Murray , 1817

『経済学及び課税の原理』 初版 Z 4/2 1035 22283 (鬼頭文庫) ; Z 4/2 676 15022

デヴィッド・リカードゥ(David Ricardo, Esq. 1772-1823)による本書は、アダム・スミスの『国富論(諸国民の富)』に並ぶ古典である。後者が資本主義経済の性質と競争市場の機構の解明に焦点を置いたのに対して、理論書である前者では経済分析手法の開発が中心にある。地代(レント)の理論、税の帰着、貿易の比較生産費説(リカードゥ・モデル)、労働価値説は、いずれも本書に依っている。マルサスやミルとも友人関係にありつつも、マルサスとは論争の中で意見を異にすることが多かった。リカードゥの理論は、一方でマルクスに、他方でマーシャルによって発展吸収されていった。

リカードゥは、1772年にイギリス(イングランド)に生まれ、学校を卒業後株式仲買人として成功した。有力な実業家のみに認められた公債引き受け団の一員となり、42歳で著述業に転向した。以後、経済研究に没頭するが、生涯を通して大学に身を置くことはなかった。

本蔵書は、昭和6年(1931年)に小樽高商が十数冊の貴重本とともに4百数十円で購入した。この初版は750部(定価14シリング)が印刷された。

47-b. On the principles of political economy, and taxation / by David Ricardo — 2nd ed. — London : John Murray , 1819

『経済学及び課税の原理』 第2版 Z 4/2 676 15023

初版への批判に答えるため、「第1章 価値論」を中心に改訂している。1,000部が出版されたという。

47-c. On the principles of political economy, and taxation / by David Ricardo — 3rd ed. — London : John Murray , 1821

『経済学及び課税の原理』 第3版 Z 4/2 676 22276 (鬼頭文庫)

第3版では、「第1章 価値論」を書き改め、さらに「第31章 機械論」を加えている。この改訂に当ってはシモン・ディ、バートン、マルサスとの議論が影響を与えた。この版は1,000部が刊行されたという。

47-d. On the principles of political economy, and taxation / by David Ricardo — London : John Murray , 1821  
『経済学及び課税の原理』(1821年版) Z 4/2 676 15024

本蔵書の表紙によれば、第3版と同じ1821年に出版されたことになる。しかし、第3版で新たに加筆された「第31章 機械論」が本版には含まれていないので、第3版以前の版とも見られる。また、本文のページも第3版と異なっている。本版の詳細については、不明である。

48. Proposals for an economical and secure currency : with observations on the profits of the Bank of England, as they regard the public and the proprietors of bank stock / by David Ricardo — London : Printed for John Murray , 1816

『経済的にしてかつ安全なる通貨のための提案』 初版

O 4/2 2520 83951 (大野文庫) ; Z 1/2 1082 22213 (鬼頭文庫)

リカードゥは、銀行券の増発が19世紀冒頭のイングランドでの通貨価値の下落を招いたとして、1809年8月に新聞に匿名で投稿した。その後2回の投稿と小冊子の刊行を経て、彼の意見は議会調査委員会報告書に採り入れられた。さらに、彼は考察を進め、金または銀との兌換を義務付ける兌換銀行券制度を本冊子で主張している。

49. Traité d'économie politique, ou, Simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent, et se consomment les richesses / par Jean-Baptiste Say — 2e ed. — Paris : Chez Antoine-Augustin Renouard , 1814  
『経済学』(全2巻) 第2版 Z 4/2 362 15490-15491

ジャン=バチスト・セー(Jean-Baptiste Say, 1767-1832) はフランスの経済学者で実業家でもあった。アダム・スミスの『国富論』に強い感銘を覚えたセーはアダム・スミスの平明な解説者としてスタートしたが、本書で「供給は需要を喚起する」という説(セーの法則)を提起し、古典経済学者たちに影響を与えた。他に「Ibid. 1817, 3ème éd. Z 4/2 362 7895-7896 (大西文庫)」もある。

50. Nouveaux principes d'économie politique, ou, De la richesse dans ses rapports avec la population / par J.-C.-L. Simonde de Sismondi, ... — Paris : Chez Delaunay, libraire ..., [et chez] Treuttel et Wurtz, libraires , 1819  
『経済学新原理』(全2巻) 初版 Z 4/2 683 15025-15026

19世紀初頭にセー、リカードゥ、マルサスらが唱えたレッセ・フェール(経済的自由主義)は物的な富を増やすものの、社会の厚生を損ない貧富の較差を増大させると、シモン・ド・シスモンディ(Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842))は本書で主張した。自らの『経済学原理』(1820年)』(本解説No.45)に先立って出版されたマルサスは、本書の重要なポイントを『経済学原理』に含めて発表した。また、同じ時期に、『経済学及び課税の原理(1817年)』(本解説No.47-a)の改訂を進めていたリカードゥは第3版(1821年(本解説No.47-c))に「第31章 機械論」を加筆した。これは、シスモンディやバートン、マルサスとの議論の結果だと言われている。

著者シスモンディは、スイスに生まれた歴史家で、政治記者で、そして経済学者であった。彼は、本書に先立って『中世イタリア共和国史』(全16巻)を、本書の後に『フランス史』(全31巻)を著した。

51. Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses / par Augustin Cournot ... — Paris : Chez L. Hachette , 1838

『富の理論の数学的原理に関する研究』 初版 Z 4/2 1674 15013

オーギュスタン・クールノー(Antoine Augustin Cournot, 1801-1877)は、フランスの数学者・哲学者。『富の理論の数学的原理に関する研究』(1838年)において、経済学に初めて微積分学を導入した。需要関数の定義や利潤極大化の条件を定式化するとともに、独占理論・寡占理論を発展させ、クールノー・モデルを残した。クールノー・モデルは、今日の非協力ゲーム理論の先駆けとも言える。

52. Mill, John Stuart (経済学原理 各版)

52-a. Principles of political economy : with some of their applications to social philosophy / by John Stuart Mill  
— London : John W. Parker , 1848

『経済学原理』(全2巻) 初版 Z 4/2 3508 235712-235713

ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-73)は19世紀イギリスの思想家・経済学者・哲学者・社会批評家であり、『自由論』、『経済学原理』、『論理学体系』、その他の著作で知られた。

『自由論』では、特に、日本にも大きな影響を与えた。J.S.ミルは、ジェームズ・ミル(1773-1836)という、高名な思想家の息子であり、幼時から父より個人教育を受け、学校に通わずに、14才までに論理学や経済学の初歩を学んだ。1823年から、父と同じ東インド会社ロンドン店に勤務するかたわら、父をリーダーとする哲学的急進派の論客として頭角を現す。経済学、哲学、政治論の著作を公刊し、大思想家とされた。経済学では、自由主義の立場から、アダム・スミスの経済学を発展させ、古典派経済学を完成したとされる。そして彼は、資本主義内での社会改良を唱え、良心的なイギリス自由主義を代表した。1860年代には、労働運動のリーダーに支持され、下院議員に当選し、多面的に活動した。選挙法改正や土地国有化運動に参加しており、単なる言論だけの人ではなかった。

ミルの『経済学原理』は、マーシャルの『経済学原理』(1890)までの経済学の標準的テキストであった。本書中の、マルクス・レーニン主義的社会主義に対する民主主義的社会主義論と真の人間の進歩には停止状態こそ最もふさわしいとする、ミルの停止状態論は、現代に向けて発信されたメッセージとして興味深い。このふたつの論は、大正期に川上肇により、日本に紹介された。尚、本書は、小林多喜二や伊藤整の小樽高商の時代に、経済学の教科書として用いられた。

52-b. Principles of political economy : with some of their applications to social philosophy / by John Stuart Mill  
— 3rd ed. — London : John W. Parker and Son , 1852

『経済学原理』(全2巻) 第3版 Z 4/2 1014 21796, 21798 (鬼頭文庫)

53. On liberty / by John Stuart Mill — London : John W. Parker , 1859

『自由論』 初版 Z 10/2 345 16155

ミルは、『自由論』で、近代社会における自由のあり方を論じ、人間の多様性や個性・独創性が失われていくことに対して、警告を発している。日本にも、福沢諭吉らによって導入され、明治期にかなり普及し、大きな影響を与えた。昭和に入り、国家主義の強まるなかで、河合栄治郎らによって『自由論』が顧みられた。

54. Autobiography / by John Stuart Mill — London : Longmans, Green, Reader, and Dyer , 1873

『ミル・自伝』 初版 Z 5/4 244 21767 (鬼頭文庫), S 5/4 200 19358

ミルが、その生い立ちから自分の人生を描いた。特に、後に結婚することになる、J.テイラー夫人のハリエットから思想的影響を受け、従来の偏狭な思想から脱皮し、ロマン主義・歴史主義・社会主義を理解する過程を記述した第6章は興味深い。

55. The subjection of women / by John Stuart Mill — London : Longmans , 1869

『女性の従属』(大内兵衛、大内節子訳の書名は『女性の解放』) 初版 Z 10/8 210 235711

女性の権利を論じた本書は、イギリスの自由主義論の古典の一つである。ミルは最大多数の最大利益という功利主義的道徳を用いて、女性が従属的地位に置かれる理由は伝統的役割にあり、そうした役割の固定化から男性が利益を得ていると論じた。だが、ミルは家庭の維持者という家族内の女性役割について問題視していない。

尚、ミル本人の言によれば、『女性の従属』は、ミルとハリエット・テイラーとの共著なのだと言う。ミルは、彼女との会話の中で、女性の社会的地位の問題に開眼し、本書を書くことになった。

56. A system of logic, ratiocinative and inductive : being a connected view of the principles of evidence, and the methods of scientific investigation / by John Stuart Mill — London : John W. Parker , 1843

『論理学体系』(全2巻) 初版 Z 10/3 45 21937-21938 (鬼頭文庫)

青年時代の精神的危機を経て、ロマン主義、歴史主義、社会主義などの新思想を吸収、とくにコントの影響を受けて社会科学の方法論の探求に向かい、それをまとめた。本書で、帰納法の論理学が体系化された。

57. Les ouvriers européens : études sur les travaux, la vie domestique, et la condition morale des populations ouvrières de l'Europe, précédées d'un exposé de la méthode d'observation / par M.F. Le Play — Paris : Imprimerie impériale , 1855

『ヨーロッパの労働者』初版 ZS 5/3 377 10138 (シエル文庫)

本蔵書は、フランス人社会学者・経済学者フレデリック・ル・プレ (Pierre Guillaume Frédéric Le Play, 1806-1882) の主著である。鉱山技師としてヨーロッパ各国で技術指導をするかたわら行った、足かけ25年にわたる労働者家庭の実態調査の記録である。厳密な家計分析とともに、家族をはじめて実証研究の対象とし、モノグラフィーの手法を採用したことによって、ヨーロッパ社会学に多大な影響を及ぼした。ル・プレは理工科学校、鉱山学校を卒業後、鉱山技師を経て鉱山学校教授に就任した。その後、社会改良運動に専念し、1867年から70年には上院議員を勤めた。社会カトリシズムを背景に、社会の安定には家族の絆が必要であると主張し、経営者の労働福祉事業の理論的支柱となった。1856年に社会経済学協会を設立し、ル・プレ学派を形成した。

58. Das Kapital : Kritik der politischen Oekonomie / von Karl Marx, Bd. 1 — Hamburg : O. Meissner ; New-York : L.W. Schmidt , 1867

『資本論』第1巻 ドイツ語版 初版 O 4/2 2502 83779 (大野文庫)

カール・マルクス (Karl Marx, 1818-1883) はドイツの経済学者・哲学者で、革命指導者である。その思想のためにヨーロッパ各地での亡命生活を余儀なくされた。マルクスは、『資本論』(第一巻1867年)で、古典派経済学を批判的に摂取しながら、資本主義経済の内的構造を、剰余価値と資本の再生産という観点から、体系的に論述した。この著作によって、かれは資本主義が歴史のひとつの過渡的な過程でしかないことを論証し、科学的社会主義を確立したといわれる。

小樽商科大学の附属図書館には、アダム・スミスの「国富論」、マルサス「人口」などに並ぶ歴史的名著として、カール・マルクス (1818-1883) の「資本論」第一巻ドイツ語版初版が所蔵されている。これは、ドイツのハンブルグのマイスナー書店から 1867年に出版された。「資本論」のドイツ語版初版そのものは、1000部発行され、世界に百冊くらいは現存しているであろう。商大所蔵のものは、リーナ・シェーラーなる女性に献呈された、著者マルクス本人の「わが友リーナ・シェーラーへ ロンドン 1867年9月18日」という献辞入りの、珍しいものである。カロリーネ・シェーラーは、ドイツ人で、マルクス家族の友人だった。マルクス夫人の弟と婚約していたことがあるが、破談になっている。主にイギリスで家庭教師をして働いていた。ロンドンに亡命中のマルクスから、発行されて数日後に贈呈されたのである。献辞入り本は世界で二十冊ある。だが商大所蔵のものは製本されていない仮どじのペーパー・バックである。出版された当時のままであり、これが珍しいのである。「資本論」はまず仮どじの体裁で発行され、読者は入手後、それを業者に頼むか自力で製本した。まったく手がかえられていない初版本は、国内では、ほかに二冊しか確認されていない。この商大図書館所蔵の「資本論」は、マルクス自署献辞入りで、なおかつ、出版当時の姿を残す、完全なかたちの初版本である。

このドイツ語版初版は、小樽高商教授を経て、小樽商大初代学長にもなった、故大野純一氏が所蔵、1983年に附属図書館に遺贈された。大野教授は、これをドイツ留学中の1930年、ベルリンの大手古本屋ヘラースベルグから買った。購入価格はおそらく、500マルク余。当時の日本円にして250円余であり、教授の一月半くらいの月給をはたいて購入したらしい。購入時は、ヨーロッパの書物によく見られるように袋どじのままであり、教授がペーパー・ナイフを入れた。大野教授は、「資本論」を持っていることをあまり人にいわなかった。1930年代半ばから45年まで、日本では「資本論」は厳禁の書だったから、だれにもいえなかったことは無理もないが、戦後もあまり吹聴しなかった。商大に遺贈された頃から、ようやく存在が知られるようになった。

59. Le Capital / par Karl Marx ; traduction de M.J. Roy, entièrement révisée par l'auteur — Paris : Maurice Lachatre et Cie. , [1872?]

『資本論』第1巻 フランス語版 初版 Z/TEE/542/31544 (手塚文庫)

このフランス語版は元々3種類あって、表紙が皆違う。小樽高商教授・手塚寿郎の文庫にあった。彼はフランスで買ったのであろう。これも本来ペーパー・バックで出版されたのであるが、この商大本は、製本されている。

このフランス語版は、9セット44分冊で、1万部発行された。マルクスは、フランス語版の刊行を重視していた。多くの訳者が候補の名乗りをあげたが、ロアにきまった。彼はフォイエルバッハ (ドイツの唯物論哲学者 Feuerbach, 1804-72) の訳者でもあった。ロアは、第2版『資本論』をもとに訳し、それにマルクスは手を加えた。これは、ラシヤトル版もある。1880年代にオリョルによる海賊版が出た。

60. Das Kapital : Kritik der politischen Oekonomie, Bd. 3 / von Karl Marx ; herausgegeben von Friedrich Engels — Hamburg : Verlag von Otto Meissner , 1894

『資本論』第3巻(全2巻) ドイツ語版 初版 Z 4/2 3555 244980-244981

『資本論』第3巻は、マルクスの原稿にもとづいて、エンゲルスが編集・出版した。本第3巻では、労働価値論の最大難点が解決され、恐慌、利潤、利子、地代などの、重要論点が解明された。

61. Grundsätze der Volkswirtschaftslehre / von Carl Menger — Wien : Wilhelm Braumüller , 1871

『国民経済学原理』第一編 初版 Z 4/2 304 7077 (大西文庫)

カール・メンガー(Carl Menger 1840-1921)は、オーストリアの経済学者で、ウィーン大学教授である。

メンガーは、ジョボンス、ワルラスと共に近代経済学の開幕を告げる「限界革命」の主要な人物である。この『国民経済学原理』(1871年)は、(1)主観的効用に基づく価格理論と(2)帰属価値による配分理論を築いた革新的な書である。彼の価格理論は限界革命の核心であり、また彼の帰属価値の概念は後のオーストリア学派の核心となった。本学所蔵の『国民経済学原理』は、イタリアの数理経済学者パンタレオーニから大西猪之助小樽高商教授に贈られたものだが、そのパンタレオーニから大西教授にあてた、面会の日時を設定した丁寧な手紙が挟まれている。

62. Théorie mathématique de la richesse sociale / par Léon Walras — Lausanne : Corbaz , 1883

『社会的富の数学的理論』 初版 Z 4/2 678 15072

フランス人のレオン・ワルラス(Marie Esprit Léon Walras, 1834-1910)は、1870年から1893年までスイスのローザンヌ大学教授の職にあり、メンガー、ジェボンスと共に限界革命の中心的な人物とみなされている。本書は、彼の主著『純粋経済学要論』(展示書番号63; Z 4/2 205 5153)の出版後に発表した論文を収録しており、複本位制を巡る貨幣問題の数学的理論を展開している。

63. Éléments d'économie politique pure, ou, Théorie de la richesse sociale / par Léon Walras — 4e éd. —

Lausanne : F. Rouge ; Paris : F. Pichon , 1900

『純粋経済学要論』 Z 4/2 205 5153

本書(初版は第1分冊が1874年に、第2分冊が1877年に刊行)は、レオン・ワルラスの主著であり、不朽の古典である。ワルラスは、限界効用均等の法則に基づく需要理論の樹立に留まらず、完全競争市場の均衡条件を数学的に論証し、一般均衡理論を構築した。今日用いられている「ワルラス法則」や「ワルラス・モデル」、「ワルラス的価格調整」の源泉が本書である。

1934年のワルラス生誕100年に際して、創立間もないエコノメトリック・ソサエティはワルラスの学問的功績を讃えローザンヌ大学に感謝状を送っている。

本書の初邦訳は、小樽高商教授手塚寿郎によって手がけられ、上巻が1933年に出版された。下巻の原稿も完成していたが、戦時の困難な時期に遭遇し出版されることはなかった。手塚教授没後、学友と門下生によって組織された手塚記念会が、事業の一つとして上下2巻を1953-4年に岩波文庫として刊行した(本書『教員』の項4参照)。

64. The theory of political economy / by W. Stanley Jevons — 2nd ed., rev. and enl., with new preface and appendices — London : Macmillan and Co. , 1879

『経済学の理論』 LHE/J 5802 2 49001 (早川文庫), Z 4/2 743 16702

ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ(William Stanley Jevons, 1835-1882)は、イギリス(イングランド)の経済学者であった。ワルラス、メンガーとともに、限界革命を導いた主要人物の一人である。『経済学の理論』(初版1871年、第二版1879年)は、功利主義的な経済人の仮定から出発し、限界原理を用いながら、満足の極大化を図る交換の結果として、完全競争市場において一物一価の法則が成立することを論証した。



65. Principles of economics, Vol. 1 / by Alfred Marshall — 2d ed. — London : Macmillan & Co. , 1891

『マーシャル・経済学原理』 第1巻 第2版 Z 4/2 269 17340

ジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理(1848)』(本解説No.52-a)で集大成された古典派経済学は、19世紀後半の限界革命を経て、大きく変貌した。限界革命の中心にあったメンガー、ワルラス、ジェボンズはそれぞれに古典派経済学を崩し、それに変わる新しい理論の構築を図った。これに対して、マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)は古典派経済学の否定ではなく、拡充する形で新古典派経済学へと発展させた。本書『経済学原理』は、市場の一時均衡、短期均衡、長期均衡という時間的な変化を重視している。マーシャルのこの部分均衡分析は、ワルラスの静学的な一般均衡理論と対称的である。さらには、今日用いられている弾力性、消費者余剰、外部経済、準レントの概念は本書によって経済学に導入された。

本書は、初版(1890)の翌年に刊行されており、第1巻と記されている。しかしながら、マーシャル自身が後の版(例えば、第8版(1920))の序文に述べているように、第2巻は当初構想されたものの、刊行されることはなかった。

66. Die Frau und der Sozialismus / von August Bebel — 25. Aulf. : Jubiläums-Ausgabe — Stuttgart : J.H.W. Dietz , 1895

『婦人論』、原題は『女性と社会主義』 1895年版 Z 10/8 218 252939

アウグスト・ベーベル (August Bebel, 1840-1913)は 古いドイツ社会民主党最大の政治指導者である。

ベーベルは職人出身で、親方になり、労働者教育協会で活動しているうちに政治に目覚め、ドイツ社会民主党を作り、その最高指導者に推された。そしてドイツ帝国議会議員にもなった。彼は、マルクス(1818-1883)とエンゲルス(1820-1895)の弟子であり、マルクス主義が正しいと見た。当時のドイツ帝国で、その強力な首相ビスマルクと、政治的に渡り合った。もちろんベーベルは、国民一般大衆と労働者の立場に立って、ビスマルクと闘ったのである。ドイツ労働者はベーベルを尊敬し、また愛した。ベーベルはいつも戦争に反対したので、その度に監獄にほうり込まれた。彼はしかしその間、監獄で勉強した。1879年に、ベーベルはこの名著『婦人と社会主義』を出版した。だが、ビスマルクの悪名高い「社会主義鎮圧法」の時代だったので、秘密に出版した。それにもかかわらず本書は売れに売れ、当時のベスト・セラーになった。人々は秘かに買ったのである。その後全世界で各国語に訳された。

ベーベルは、多くの政治的小冊子や論文を書いた。本書は、ベーベルの主著である。このなかで、彼は、女性の地位に関する初期マルクス主義理論を提起し、女性抑圧の原因、およびこれを変革する戦略を分析した。性的自立および結婚の衰退についての彼の見解は、初期社会主義フェミニズムの影響を受けたものであり、アレクサンドラ・コロンタイが「女性のバイブル」としてこれに言及した。初版は1879年。

67. Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie / von Joseph Schumpeter — Leipzig : Duncker & Humblot , 1908

『理論経済学の本質と主要内容』 初版 O 4/2 02534 84074 (大野文庫), S 4/2 1048 022352 他

本書は、ヨーゼフ・シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950)の最初の著書であり、ワルラスの強い影響を受けた一般均衡理論を展開している。彼は「静態的経済」と「動態的経済」を区分し、本書では前者を扱っている。4年後(1912年)に出版した『経済発展の理論』(Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung)では、彼は資本主義を本質的に変動を内在する動態的経済と見て、創造的破壊の姿を考察している。

オーストリア人のシュンペーターは、理論経済学の研究から出発し、後には幅広く社会科学にわたる著書を出版した。また、国際学会であるエコノメトリック・ソサエティーの創立に尽力した。

68. The Utopia of Sir Thomas More, in Latin from the edition of March 1518, and in English from the first edition of Ralph Robynson's translation in 1551 / with additional translations, introduction and notes by J.H. Lupton — Oxford : Clarendon Press , 1895

『ユートピア』 Z 3/7 1497 2357153

トーマス・モア (Thomas More, 1478-1535)は、近世最大の社会主義思想家。ルターの福音主義を否定し、カトリック的平和主義と社会正義を説いた。ヘンリー8世の大法官になったが、大逆罪で処刑された。彼はこの書で理想の国を描いた。この Lupton 版は学問的に最も厳密な校訂版である。初版は1516年。

69. Illustrierte Sittengeschichte vom Mittelalter bis zur Gegenwart, 6 Bd. / von Eduard Fuchs — München : A. Langen , [1909-1912]

『風俗の歴史』(全6巻) 初版 Z 10/6 2643 238570-238575

エドゥアルト・フックス(Eduard Fuchs 1870-1940)はドイツの文明史家、美術史家、ドイツ社会民主党員である。

フックスは、20才頃から社会主義運動にとびこみ、月刊雑誌の編集に従事した後、ベルリンで、絵画史と社会史の研究に没頭し、『古代から近代にいたるヨーロッパの漫画』全2巻(1901-1903)、『漫画にあらわれた女』(1906)、『エロチック美術の歴史』(1908)、『風俗の歴史』を次々に出版し、世界的に有名になった。

その後も精力的に漫画の研究書を出版した。1933年にヒトラーの弾圧にあつて、スイスに亡命した。フックスは、文明のいろいろの発展段階における性行動の歴史は、人間の歴史のいちばん大切な要素のひとつにはかならないとの観点から、本書で、中世末期以後の風俗の歴史、この歴史時代の性モラルの考え方や要求のいろいろな変遷を、近代科学の角度から歴史的に記述している。

本書は、マルクスの『資本論』とならび、かつてのドイツ資本主義全盛時代が生んだ、国宝的な古典だそうである。しかし、ヒトラーの1933年5月の焚書の最初の対象として焼かれ、今日では稀覯本になってしまった。近代的意味におけるドイツで初めての文化史研究書である。

70. The general theory of employment, interest and money / by John Maynard Keynes — London : Macmillan ; New York : Harcourt, Brace and Co. , 1936

『雇用、利子および貨幣の一般理論』 初版 O 1/2 2295 83638 (大野文庫), S 4/2 889 19491 他

本書が、いわゆる「ケインズ革命」の源泉である。経済理論の面では、集計的な経済変数によるマクロ経済学を確立し、有効需要の原理に基づく経済政策の有効性と流動性選好による貨幣理論が展開されている。また、広く政策の面で見ると、本書は裁量的財政政策を理論付け、後の福祉国家観や修正資本主義観の柱を与えた。

ケインズ(Lord John Maynard Keynes, 1883-1946)は20世紀を代表するイギリスも経済学者であり、ケンブリッジ大学での研究活動のみならず、大蔵省、言論界、国際金融と多彩な領域で活躍した。

71. Value and capital : an inquiry into some fundamental principles of economic theory / by J. R. Hicks — Oxford : Clarendon Press , 1939

『価値と資本』 初版 Z 4/2 988 20408, S 4/2 988 21766 他

イギリスの経済学者ジョン・リチャード・ヒックス(Sir John Richard Hicks, 1904-1989)は、本書において、ワルラスの一般均衡理論に短期と長期を区別するマーシャルの均衡分析を統合し、現代の一般均衡理論の中核を築いた。さらに、現在の比較静学分析、序数的効用による需要分析と消費者余剰はすべて本書に依っている。

本書刊行の8年後に『経済分析の基礎』(Foundations of economic analysis)の中で、サミュエルソンは次のように本書を評している。「『価値と資本』は、ケールノー、ワルラス、パレート、マーシャルの古典的労作と並ぶ地位を歴史の中に占めるであろう。」(p. 141)

ヒックスは、本書に代表される一般均衡理論への先駆的貢献により1972年にノーベル経済学賞を授与されている。

### 【今展示会で初公開の貴重外国図書 No.72~75】

72. Chur-Braunschweig-Lüneburgische Landes-Ordnungen und Gesetze, auf Ihre Königl. Majestät von Großbritannien als Chur-Fürstens zu Braunschweig-Lüneburg Allergnädigsten Befehl zusammen getragen und an das Licht gegeben — Göttingen : Königl. privilegierten Universität, 1739-1742

『ブラウンシュヴァイク・リューネブルグ選帝侯領の領邦条例・法』(全8巻中4巻を所蔵)

Z 2/2 458 304196-304199 (解説は、No.73 と共通)

73. Sammlung der Verordnungen und Ausschreiben welche für sämtliche Provinzen des Hannoverschen Staats, jedich was den Calenbergischen, Lüneburgischen, und Bremen-und Verdenschen Theil betrifft, seit dem Schlusse der in denselben vorhandenen Gesetze sammlungen bis zur Zeit der feindlichen Usurpation ergangen sind : mit Genehmigung des Königl. Cabinets-Ministerii / hrsg. von Ernst Spangenberg — Hannover : Hahnschen Hof-Buchhandlung , 1819-1825

『ハノーファー国家の全州(カーレンベルク、リューネブルク及びブレーメン・フェルデン部分)の条例・通達集』

(全7巻中6巻所蔵) Z 2/2 459 304200-304205

## [No. 72, 73 解説]

ドイツ北西部を領有したハノーファー選帝侯領（主に現ニーダーザクセン州の東部、さらに現シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州の南端部）の近世期の法令集である。

18世紀以前のドイツの諸国家(領邦)は、この時期のヨーロッパ諸国家の通例に違わず、歴史的に独自に発展した諸地方の集合体(同君連合)で、様々な法領域に分裂していた。18世紀のハノーファー選帝侯領はその好例である。それはリューネブルク公領、カーレンブルク侯領などの、独自の法と議会をも11の地方(歴史的領邦)から成り立っており、しかもその統治者ハノーファー選帝侯(ブラウンシュヴァイク・リューネブルク家)は、1714年以降イギリス国王でもあり、現在の同王室の祖先にあたる。

このような事情を反映し、72も73も地方→分野→年代という順に法令が編纂され、72では16世紀以降1740年まで、73では1740年以降（一部地方については16世紀以降）1811年までに公布されたものが収録されている。内容的には、特に農業関係法制が注目される。ハノーファー選帝侯領に統合される諸地方は、貴族その他の領主たちの農民支配に16世紀以降領邦君主が租税収入確保のために制限を加えた農民保護策によって領主と農民の関係が厳密にされ、後者が安定した世襲的土地保有権をもつというマイアー法が形成されたことで知られるが、この過程で領主による農民支配のあり方が領邦法によって規定されることにもなり、18世紀後半にはそれを体系的かつ網羅的に法典化した地方もあった。

74. Handbuch einer historisch-statistisch-geographischen Beschreibung des Herzogthums Oldenburg sammt der Erbherrschaft Jever, und der beiden Fürstenthümer Lübeck und Birkenfeld / von Ludwig Kohli — Bremen : W. Kaiser , 1824

『オルデンプルク公領及びビューファーク世襲領・リューベック侯領・ビルケンフェルト侯領の歴史・統計・地理的叙述』（全3巻） Z 6/2 192 304475-304477 （解説は、No.75 と共通）

75. Historisch-geographisch-statistische Beschreibung der Grafschaft Ravensberg in Westphalen / von P.F. Weddige — Leipzig : Weidmann , 1790

『ヴェストファーレンのラーヴェンスベルク伯領の歴史・統計的叙述』（全2巻） Z 6/2 193 304478-304479

## [No. 74, 75 解説]

18・19世紀前半にドイツ各地で、各地方の国制・行政・司法の歴史的事情、住民の人口や社会構成や宗教事情、農業生産や商工業活動などの経済地誌・統計の説明からなり、当該地方の政治・経済・社会事情を総合的に叙述しようとする著作物が盛んに出版された。著者は地方官吏・統計家やジャーナリストなど様々であるが、特に政府の公式統計が未整備な時代にあつて、非常に貴重な情報源であつた。

74はドイツ北西部のオルデンプルク公領（現ニーダーザクセン州西部を中心とする）、75は同じくドイツ北西部のラーヴェンスベルク伯領（現ノルトライン・ヴェストファーレン州東部）に関するものである。経済地誌に関しては、両者とも、地勢・土壌などの自然環境や農産物、土地用法や農法などの情報を含むほか、地方的特性を反映して、74では干潟が広がり、また高潮常襲地帯である北海沿岸部の堤防・排水組織や築堤・干拓（「土地獲得」と呼ばれている）に関する叙述、75では最大の輸出産業であつた亜麻織物業（社会学者マックス・ヴェーバーは中心都市ビーレフェルトの亜麻織物商人家系の出自である）に関する叙述や農民屋敷（家族や奉公人と家畜が同じ屋根の下で暮らす、北ドイツ式の大きな母屋やそれを中心に納屋・パン焼き小屋・隠居小屋などが配置された屋敷地）の詳細な図が注目される。

(外国書 終)

## ☆☆ 和漢書 ☆☆

### 1. 林子平『三国通覧図説』（写本）1800(寛政12)年 H 6/2 120 14607（本学CGS所蔵）

林子平(はやし しへい)1738-1793(元文3-寛政5年)は、江戸時代の経世家。終生、仕官できなかった。

天明5年(1785)年、『三国通覧図説』を著わし、朝鮮、琉球、蝦夷、三国の地理を述べ、とくに蝦夷地の開拓を力説した。これは御書物所に上納された最も古い北海道論の一つである。他に彼の著作として、『海国兵談』(1786年)もある。商大所蔵の本書は、寛政12年の写本である。



### 2. 福沢諭吉『文明論之概略』 初版 1875(明治8)年 S 10/1 1050 236219-236224

『学問のすゝめ』と並ぶ福沢諭吉の代表的著作。文明の発達と東西文明の比較を通じて「西洋の文明」の外形ではなく、精神を学ぶことを論じた。日本の「権力の偏重」が指摘され、「民心の改革」が希求された。

### 3. 福沢諭吉『芝新銭座慶応義塾之記 中元祝酒之記』 1868(慶応4)年 X 11/3 598 236098

中は「芝新銭座慶応義塾之記」全 18ページものである。慶応義塾最古の資料、規則。

### 4. 森鷗外『輓近脚本梗概三篇 森鷗外自筆草稿』 Z 9/2 3002 236097

ショオ作 『悪魔の書生』

アンドレイフ作 『IGNIS SANAT』 梗概

ズヴェルマン作 『最終の訪問』

エミール・ルウドキツヒ 『拿破篇』

(三篇とあるが、四篇である。)

### 5. 『種痘亀鑑』 不分巻 / 久我克明述 — 東京：須原屋伊八：島村屋利助，明治4[1871]

Z 7/6 962 236099

開成所つまり東京大学の前身の医学部で、使われた教科書。アイヌ人に天然痘が流行ったので、直そうとした。

## 【今展示会で初公開の貴重漢籍図書 No.6～8】

### 6. 明・胡廣等奉勅撰、李廷機校『(新刻九我李太史校正大方) 性理全書』 70巻 一

明・万暦31(1603)年刊(後印) 浅野梅堂旧蔵 訓点書入有り 12冊 Z 9/3 56 2597-2598

本書は、明・永楽帝の勅命によって胡廣らが編纂した『性理大全』に、李廷機(号・九我)が校讐を加えたものである。「性理学」とは「性命理気」を説く宋学、特に朱子学を指し、『性理大全』はその説を集大成した書物であった。

永楽帝は、他に『五経大全』、『四書大全』も編纂させており、『性理大全』と合わせ「永楽三大全」と呼ばれている。

巻21の末に、儒者浅見綱齋が元禄10(1697)年に記した識語があるほか、全巻にわたって朱・黄・緑・藍色の墨による訓点や書き入れが見える。また、各冊冒頭に「浅野源氏五萬卷樓圖書之記」という蔵書印があるので、漱芳閣に書画善本を所蔵した旧幕臣浅野梅堂(長祚・1816～80)の旧蔵本である。記録によると、本学開校2年後の大正2(1913)年、11円で購入されたい。

### 7. 清・万樹『詞律』 20巻

清・康熙26(1687)年序刊(保滋堂) 8冊 Z 9/3 1369 200194-200201

唐代中期に発生した詞は、詞牌とよばれる曲調に合わせて歌詞をうたう歌謡文学である。唐の後期から宋代に隆盛したが、後に曲調は滅び、清代に韻文として復興した。『詞律』は、詞牌を字数順に排列し、それぞれの詞牌について文字数、句読、押韻、平仄などを解説した詞譜である。

『詞律』は、清・光緒2(1876)年に恩錫・杜文瀾の校記等を付した『校刊詞律』が出版され流布しているが、『校刊詞律』には文字の改悪や誤った校訂が見られるので、この康熙本『詞律』の方が価値は高い。

### 8. 明・陳懿典『(鏗)華真經南三註大全』 21巻

江戸刊 姉小路家旧蔵 訓点書入有り 21冊 Z 9/3 458 53738-53758

本書は、明・万暦21(1593)年の自新斎余紹崖刊本に訓点を加え重刻した和刻本漢籍である。

『南華真經』とは『莊子』の異称であり、林希逸(口義)・陸西星(副墨)・李光縉(膚解)の三注に諸家の注釈や評語を加えて集成した書である。

各冊冒頭には「姉小路家蔵書」の印が押され、元禄9(1696)年と享保7(1722)年の2度、読了の識語が見える。朱墨によって句読が全篇に加えられ、書き込みも随所にある。当時の姉小路家当主・公量(きんかず)もしくは実紀遺愛の書であったかもしれない。本学は昭和33(1958)年に5千円で購入したと記録がある。

## ☆☆ 商大の卒業生 ☆☆

### 1. 小林多喜二

1-1. 『蟹工船』 戦旗社 1929 (日本プロレタリア作家叢書 No.2) 初版 X 9/2 2971 236216

『蟹工船』の初版は、1929年発行本で、『三・十五』と共に収録されて出た。第二版は、11月発行本で、『三・十五』が除かれてある。小林多喜二のもっとも有名な小説とされるもの。北海道の蟹工船の悲惨な状態を描いた。

1-2. 『一九二八年三月十五日』 戦旗社 1929 (日本プロレタリア作家叢書 No.9)

第2版、単独本では初版 X 9/2 2972 235555

特別高等警察による全国的共産党弾圧事件を、小樽を場面としてとりあげ、警察の激しい拷問場面を含む、小樽の労働運動の人々を描き、文壇にデビューした。小林多喜二の出世作。

1-3. 『不在地主』 日本評論社 1930 初版

X 9/2 2974 235558, Z 9/2 2974 25890

北海道の富良野・小樽で起きた磯野小作争議を題材にした小説。はじめ『中央公論』に載り、小林多喜二が当代一流の小説家と見なされた。だが、この小説の発表がきっかけとなって、勤めていた北海道拓殖銀行を首になったという伝説が生まれた。

1-4. 『工場細胞』 戦旗社 1930 (日本プロレタリア作家叢書 No.10)

初版 X 9/2 2973 234446

小樽の運河沿いの製缶工場を舞台に、組合およびストライキ行動を描いた小説。小林多喜二上京後に出版された。

1-5. 『東俱知安行』 改造社 1931 初版 X 9/2 3008 237448

日本初めての普通選挙権にもとづく総選挙が1928年に行われ、多喜二はこの時、労農党の選挙を応援し、この紀行文的小説を書いた。

1-6. 自筆稿(書き込み) 『大杉栄論集 正義を求める心』 アルス 1921. X 0/1 35 732

この書には「附録」があり、クロポトキンの「青年に訴ふ」で、大杉栄の訳である。だがその10章がほとんど削除されているので、小林多喜二が訳して書き込んだ。原文は、『小林多喜二全集』第七巻にほぼ再現された。

1-7. 自筆稿(書き込み) 『中央公論 大正13年1月号』 1924. X 14.2 C 1824

高商在学中の多喜二が雑誌に掲載された志賀直哉の「雨蛙」や菊池寛の「震災余譚」などの作品に批評を書きこんだ。これらの書き込みは平成15年に本学倉田稔教授の調査により新たに発見された。

### 2. 伊藤 整

2-1. 書簡 3通 早川徳治あて

2-2. 原稿 『日露開戦譚』 原稿400字x10枚 全集未収録 Z 9/2 \*消\* 000155

2-3. 『青春』 河出書房 1938 初版 X 9/2 2978 236100

最初の書き下ろし長編小説。

2-4. 詩集『冬夜』 近代書房 1937 初版 X 9/2 2979 236101

限定版、装幀は、棟方志功である。

